

佐山 豪太（2015年度採用）

上智大学外国語学部

ロシア語学科



私は2015年10月から2016年3月にかけて、本事業のフェローシップによってロシアで研究をする機会に恵まれました。モスクワのヴィノグラードフ名称ロシア語研究所で私は研究活動を行なっていたのですが、そこで得られた知見は、今でも研究・教育活動の両面に寄与をもたらしています。

●若手研究者等フェローシップに応募したきっかけ

ホームページでその存在を知り、過去に採用された方にメールで質問をしました。応募に際して非常に魅力的だったのは、こちらから比較的自由に指導教官や所属機関を選べた点で、これは自らの研究を進めるにあたって最も重要な利点でした。

●フェローシップでの経験

私の研究テーマは日本ではあまり研究されておらず、当該分野の専門家から意見をもらえる機会は多くありませんでした。一方で、フェローシップ中に私が所属していたロシア語研究所には同分野を調査しているロシア人研究者が在籍しており、意見交換や議論をすることができました。また、現地の指導教官はコーパス言語学や認知言語学を研究対象としており、私のテーマと重なる部分が多く、日々の講義や報告を通じて自身の博士論文の執筆が大きく前進しました。

他に、フェローシップ中の経験として特筆すべき点は、欧州で開催される学会に参加しやすいということです。フェローの期間中に国際学会で3回、ロシア国内学会で1回研究の報告を行い、その際、会場から貴重な意見をもらうことができました。

●フェローシップ後の活動

帰国してからも指導教官や現地で知り合った研究者と連絡を取ることがあり、彼らと2017-2019年まで科研事業を通じて共同で研究を行いました。また、現地で得られた知識（コーパス言語学、認知言語学、テキスト処理の知識など）は現在でも研究に活用しています。くわえて、当時作成したテキストデータや教材・語彙リストは、研究だけでなく勤務校でロシア語を教える際にも非常に役立っています。

●フェローシップでの経験を通して、ロシアやロシア人との交流について感じたこと

私にとって久しぶりの長期滞在でしたが、モスクワは非常に住みやすくなった印象を受けました。治安も以前より改善されており、滞在中に嫌な目にあうことはありませんでした。

フェロー中に日本語を学んでいるロシア人学習者と交流する機会があり、熱心な学生が多く驚きました。日本語だけでなく日本文化にも興味と理解を示してくれ、コロナ禍になるまではフェローの際に生まれたこの縁のおかげで、モスクワ留学中の弊学の学生をネイティブスピーカーとして日本語の授業に受け入れてくれていました。